

フロイトの家を訪ねる

津守 真

九月の末、ブラハで行われた O M E P（世界幼年教育機構）理事会に出席することになり、私はウィーンからブラハに入ることにした。かねてから私は、フロイトが仕事をした十九世紀末ウィーンを、百年たった二十世紀末に自分の足で歩いてみたいと思っていた。モスクワで乗り換えてウィーンに到着した日の午後、ブラハへの汽車の切符を旅行社で買うと、直ちに私はフロイトの家を探した。いまは記念館として保存されているフロイト・ミュージアムは、地図に小さく載っているだけである。

ウィーンの旧市街は、リンクという環状道路に囲まれ、そこを市電が走り、一時間もかからずにひとまわりすることができる。旧市街の中心には十二世紀頃に建てられた聖シュテファン教会の広場があり、世界中からの観光客の雑踏の中にある。そこから放射状に走る街路の両側には十七、八世紀からの石造りの装飾建築がぎっしりと並び、その中に教

会、王宮、美術館、博物館があり、ハプスブルク王朝の爛熟した文化の名残りをいたるところに見ることが出来る。フロイトはステファン寺院をシュテツフルと呼び、「あのいやらしい尖頭」といっているが、この旧市街の華やかさはその頃からいままあまり変わっていないのだろうと思われる。そして現在も普通の人々がその中で生活もしている。

リンク（環状道路）を走るD番の市電に十五分ほど乗って賑わいからは離れたところ、シュリック・シュトラッセでおりると、その角から斜めに外側にのびる通りがベルクガッセである。アカシヤに似た並木の両側に、古い建物が並んでいる。市電の停留場から数軒先がベルクガッセ十九番として知られている家で、扉のわきの標識はあまりに小さくて何度も通り過ぎてしまったほどだった。私が扉の前に立ち止まると同時にひとりの婦人が立ち止まって標識を見上げ、ようやくたずね当てたと顔を見合わせた。開館時間は九時から一時、金・土曜日は九時から三時と記されている。すでに夕方、私共は入ることはできなかった。その婦人は東ベルリンから来て明日は帰るといふ。私は「そんなに遠くないか



「らまた来られますね」というと、「遠くないはよかった、あなたに比べれば」といつて笑った。ガッセというドイツではもっと狭い路をいうのに、これは広い道路だとその婦人はいった。ベルクガッセ十九番と呼びならわされているこの家に、フロイトは一八九一年九月二十日から一九三八年六月五日まで、四十六年間住み、ここで有名な精神分析の臨床をし、著述をし、家庭をつくった。そして一九三八年にナチに追われて英国に亡命した。フロイトが三十五歳から八十一歳のときである。

私がフロイトの名を知ったのは、多分私の中学三年ころだったと思う。そのころ、父の郷里から出て来て一緒に住んでいた従兄が悩み多い青年で、私はよく話相手になった。その従兄の書棚にフロイトの本があり、性という字がいくつも並んでいて、それだけで私には触れてはならない書物のように感じられた。商業学校にいたその従兄は、召集されて兵隊にゆき、比島で戦死した。その後私は、大学の実験心理学の講義で、フロイトは既に理論的に否定されたと聞き、別の視点から見直そうともせずに長い年月を経た。

あるときから実証科学的方法では保育の実践を明らかにすることはできないと考え至った私は、それとは違う思考方法を探し求め、ユング、フロイトをも本格的に読みはじめた。そしてフロイトが性というときには、生命的エネルギーという広義で考えている場合も多いことを知った。もちろん、いわゆる性はそこからはずすわけにはいかないが、それを忌避するのは、その人の観念の中での性にあてはめて見るからである。フロイトの患者

は、十九世紀末のハプスブルグ王朝最後の時期の、華やかな社交界で生きるのに困難を生じた人々だった。その人々の心の問題にふれたとき、彼は医者としての権威を放棄し、相手の人間と対話する臨床を実践することを決意した。患者がフロイトとの関係の中で、自由な気持で自分自身と向き合えるようになったとき、心の底にひそむ幼児期の体験にゆきあたった。フロイトは、そのひとつひとつを丁寧

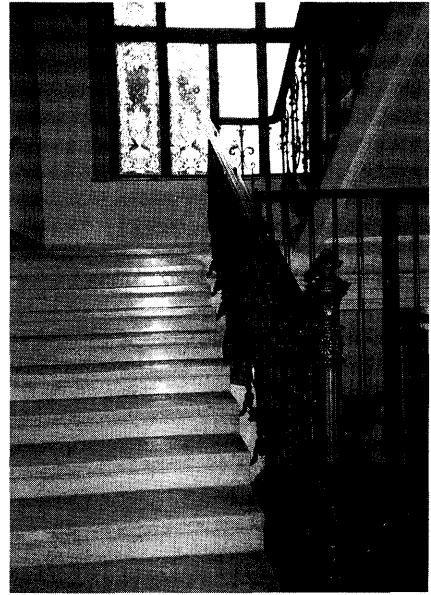
に考へ、彼自身の中にも共通なものがあることを発見した。

こうして治療者自身も自己理解を深めつつ患者との間の臨床実践をすすめたとき、患者の人生は新たな方向に開かれる。これはそれまでの学問にはなかった力動的な方法である。

フロイトはこのような臨床を、ベルクガッセ十九番の家ではじめた。同じ家の中で、臨床の実践と家庭生活とをほとんど一生涯にわたってなしつづけた。ウィーンの繁華な街に比べたら、質素で見栄えのしない町外れの家で、フロイトというひとりの人の生涯と共にその偉大な文化的事業がなされたのであった。

ウィーンでの第一日目は、私はベルクガッセ十九番の家が見える街角のレストランで食事をしながら、この通





りを何度も歩いたであろうフロイトを思った。

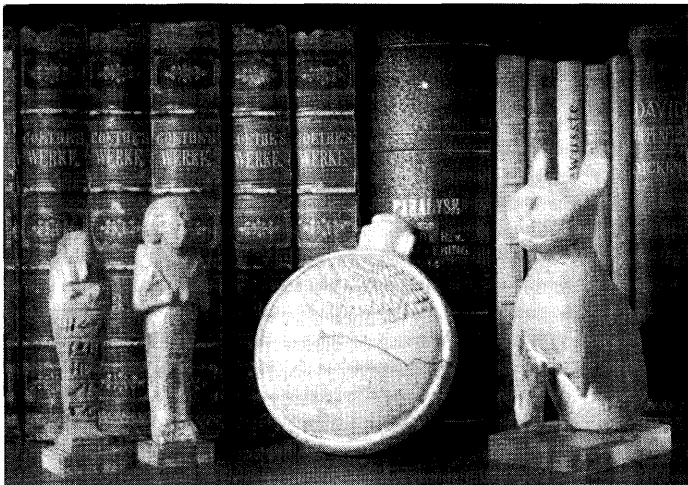
次の日、私は朝九時に間に合うようにベルクガッセ街に行った。ベルを鳴らすと同時に扉を押してくださいとわきに小さく記してある。扉の内側は土間のようになっていて両側に階下の家があり、やや右手に手すりのついた回り階段を上ると左右に家の入口の扉がある。右側がフロイトの仕事部屋と書斎、左側が居室である。右側の扉を開くとその奥が記念館になっている。ドイツ語、英語、フランス語それぞれの分厚い説明書が手渡され、それをめいめいが読みながら各室の展示をみてまわる。10シリングほど払って見学する。

待合室、臨床室、書斎と三間つづきの部屋に、出生から死ぬまでの資料、写真、所蔵品などが年代順に並べられている。説明書の最初には次のことが記されていた。(1)八十年

間にわたってフロイトが愛し、また憎悪した（Freud liebt und hasst）このウィーンの町の生活背景をできるだけ描写するようにしたこと、最も重要で意味のあるものだけを選択するというようなことがないようにしたこと
(2) 身体的並びに知的な面でのフロイト

の日常生活をありのままに示すように注意を払ったこと、ひとりの人間であり思索する人であったフロイトは、多くの人々の原型であり典型であるので、見学者が「冷たい、風変わりな、非現実的な人物」として見ることはないように、「どこかでわれわれ自身と結びついている人間」として見るようにしてもらいたいこと、そのために他人の注釈よりも、フロイト自身の言葉の引用を重んじたこと。実際、その分厚い説明書と展示をひきくらべながらゆっくりと見てゆくと、殆ど一日必要としてしまう。この日、私の他にも数人の人が、九時から三時までこの中で過ごしていた。

フロイトは一八五六年、モラビア（現在のチェコスロバキア）のフライブルクで生まれ、三歳のときオーストリアのウィーンに移り、死ぬ前年一



九三八年までウィーンに住んだ。臨居室には彼が好んで蒐集した考古学的置物、小さな像や壺などが多数並べられており、壁にはグラディーヴァのレリーフ（模造品）がかかっている。医学研究者の時期からの著書や、大著「夢の研究」その他の書物、論文の初版が並べられている。いずれも粗末な紙表紙である。

一番奥の書斎には、彼が使っていた皮革張りの単純なつくりの椅子の模造品がおかれているが、机はここにはない。窓に飾り枠のついた小さな鏡がかけられており、それは以前と全く同じ位置だという。この窓から外を見ると内庭をへだてて、向かいの家の屋根と壁がみえる。脇にあるとちの木の大木が沢山実をつけていた。これはフロイトも見ていたに違いない。日常の生活も仕事もみなこの二階でなされた。ひとりの人がほとんど一生涯を同じ家の中に住み、そこで実践の仕事をし、思索しつづけたのを見て、実践の学問をするのに、「とどまる」ということが大きな意味をもつことをあらためて考えさせられた。しかし、すべての人にそれが許される



とは限らない。ユダヤ人であったフロイトは、毛並みのよいウィーンの社会からは受け入れられず、華やかな街の中心から外れたところで、そこにとどまるように運命づけられていたように思える。そして敢えてその運命を自分のものとして選びとったところに、この人の生涯と学問があったのではないか。

フロイトの家はやや町のはずれにあるとはいえ、王宮やシュテファン寺院まで歩いて三十分位の距離である。この音楽の都にいなながら、彼は音楽には趣味がないといっていた。彼はこの華やかな世界を隣に見ながら、その渦の中にいる人々の影の部分を知っていたのだろう。十九世紀末ウィーンは、どこか現代の東京に似ているように思える。

一日かけてこれらの展示を見て回り、彼自身の著作やアーネスト・ジョーンズの「フロイトの生涯」ですでに知っていることがすべてここにあることを知った。この家の中でこれらのことが起こっていたことを、書齋におかれた椅子に坐って内庭を眺めながら、不思議に思った。書齋は決して広いとはいえない質素な部屋で、この人が長年思索しつづけたその空気がいまもここに漂っているように思えた。

ここを訪れて、はからずもとくに心を動かされたのは、この家でのフロイトの晩年の日である。丁度ヒットラーのオーストリア侵攻の前後である。展示をした人々は、できるだけ偏らずに資料を並べるといいながら、その思いは晩年のフロイトに至ってとどめ得ない迫力が溢れ出ているように思える。

一九三二年六月の書簡には次の文章がある。「現実には、ヒットラーがオーストリアを征服すれば直ちに私や他の人々に襲う身の危険を、私は決して低く見積もる者ではありません。しかし、耐えねばならぬことを耐えるべく覚悟して、冷静に考え、できるだけ長い間それは考えないでおくことに決めました。現在のところは、オーストリアはドイツの侵略をまぬがれるように思われます。」

一九三三年には、アインシュタインとの間に「何故戦争があるか」の書簡が交された。「他の人々もベシフィスト——平和主義者——になるまでに、どれだけの期間、私たちは待たねばならないのでしょうか」とフロイトは記す。

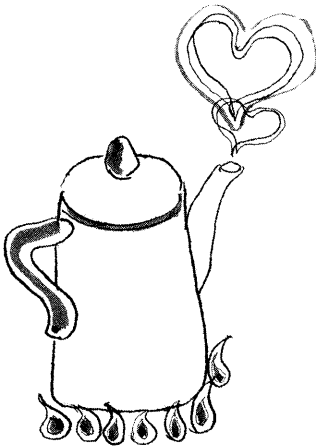
一九三八年三月十五日、ウィーンにドイツ軍は侵攻した。王宮わきの「ヘルデンプラッツ——英雄広場——」で総統（ヒットラー）はウィーン市民に向かって演説した。フロイトは論文の中に次のように記した。「われわれはこのできごとを、個人が自我の理念を引き渡し、リーダー（総統）に具現されている集団理念をそれに代えたものと解釈する。そして更にわれわれは付け加えねばならない。このような運命は、それぞれの人にひとしくかかってくるものではないと。」ユダヤ人フロイトの記事である。展示の説明文は更に次のことを記す。

「私はヒットラーの手がウィーンにまでびてきたのを見た。私はゲシュタポがベルクガッセのあの懐かしい家に入るのを見た。彼らがこの研究所を閉鎖し、精神分析の出版物も、書棚に取められた美しい本の数々をもただのパルプにかえてしまうために持ち去るの

を見た。そして、私は、八十二歳のフロイトが、家族と共に自由な英国へと脱出するのを見た。そこで彼は一年たたぬうちに、残酷な病気に襲われて死んだ。彼は英雄的な諦観をもってその病いを長年の間耐えてきたのだった。」

「一九三七年九月二十三日、ジグムント・フロイト、ロンドンで死去」と簡単な死亡通知が展示されていた。

私がベルクガッセ十九番を訪れたのは、丁度、一九八八年九月二十三日で、没後五十年に当たっているのに気が付いた。何の記念行事があるのでもなく、何人かの訪問者と一緒にこの家で数時間を過ごし、その書斎の窓から内庭のとちの木を眺めつつ、それぞれが説明書からメモを写した。



(愛育養護学校)